第52回全日本中学校国語教育研究協議会　香川大会　　第32回香川県中学校教育研究会国語部会　研究大会

事前研究の手引き

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 香川県中学校教育研究会国語教育研究部会

１ 研究主題

　　　生きて働く力を育む国語教室　～言葉による見方・考え方を働かせ、深まる学び～

２　研究主題に込めた願い

（１）目指す生徒の姿

「言葉による見方・考え方」を働かせることで学びが深まることを実感し、学んだ力を生かして未知の状況にも対応し、人生や生活を豊かにしようと学び続ける生徒

現在、私たちの日常にはどんどん人工知能（AI）が普及し、生成AIも台頭してきた。また、突然訪れた新型コロナウイルス感染拡大など、先行き不透明な予測困難な時代が到来している。このように急激に変化する時代を生き抜くためには、様々な知識や情報を活用しながら、自分の考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりする力をもった人材が求められている。アインシュタインは「学校で学んだことを一切忘れてしまった時に、なお残っているもの、それこそが教育だ」と述べたと言う。学びへの向きあい方や構えが生徒たちの中に残り、授業での学びが授業の中だけでとどまるのではなく、日常生活をはじめとする人生や社会、さらには未知の状況にも対応できる「生きて働く力」をこそ育んでいきたい。

（２）「生きて働く力」について

香川県では「生きて働く言葉の力」の育成を目指し、平成21年度からこれまで研究を続けてきた。「生きて働く言葉の力」を育むためのねらいやつけさせたい言葉の力を明確にしたうえで、生徒が主体的に学習に取り組めるように指導内容や方法を工夫してきたため、指導法の工夫には一定の成果が得られた。しかし、一方で、本当に子どもたちにとって、先に述べたような「生きて働く」力となっているのか、授業の中だけにとどまったものになっていないか、そもそも「生きて働く力」とは何か、という課題も見えてきた。具体的にどのような状態であれば、私たちが目指す「生きて働く力」が育ったと言えるのか、原点に立ち戻り研究を行うこととした。

そこで、まず、私たちは資質・能力の三つの柱を説明する言葉に着目した。三つの柱では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」という言葉に注目が集まるが、私たちは、むしろ、「**実際の社会や生活で生きて働く**（知識・技能）」「**未知の状況にも対応できる**（思考力・判断力・表現力等）」「**学んだことを人生や社会に生かそうとする**（学びに向かう力、人間性）」という言葉に着目した。今大会では、「生きて働く力」を育むために、国語教室で習得した力を、どう人生や社会の中で活用できるようになるのかということに焦点をあて、そのことを生徒たち自身が実感できる授業を目指していきたいと考えた。

（３）「言葉による見方・考え方」について

　生徒が学習時だけでなく生活全体の中で、自分の思いや考えを深めるために、言葉と言葉、言葉と対象の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。

学習指導要領解説には、「言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。」と記載されている。

　しかし、生徒たちにとっても教員にとっても「『言葉による見方・考え方』を働かせる」「『言葉による見方・考え方』を鍛える」ということはイメージしづらい。国語科には「教科内容がない」という指摘は古くからされてきた。授業で「確かなもの」「新しいこと」として何を学んだか、どんな力がついたかが曖昧で、上達感、達成感に欠け、生徒たちの探究心や好奇心を刺激するような学習が行われてこなかったからである。他教科のように、普遍的、客観的な「知識・技能」として何を学ぶか、本当に学ぶべき価値のある「知識・技能」とは何か、どんな思考を働かせるべきかといったことを明確にした学習活動が展開される必要がある。

そこで、本研究では、「言葉による見方・考え方」を、次のように捉え直した。

「見方」については、「どのような視点で物事を捉えるか」、「考え方」については、「着目した視点でどのように思考していくか」を表すものと解し、「言葉による見方」を「人物設定・語り手・象徴・根拠・中心・付加・色彩」など言語事項に係る視点とし、「考え方」を、「比べる・つなげる・変える」などの汎用性のある思考の様式であると定義した。これらの組み合わせを「言葉による見方・考え方」であるとイメージし、授業を構想した。

３　研究概要

（１）習得・活用を意識した単元構成

　国語科の授業の中で、「生きて働く力」を育むために、単元構成の中に、「言葉の力に気付く習得の場面」と「習得した力を別の教材で活用する場面」を意図的に組み込むことで、言葉による見方・考え方を鍛え、自分の習得した力を人生や社会生活の中で生かす可能性を生徒たち自身が感じられるのではないかと考えた。これまでも、「習得」「活用」の授業は行われてきたが、「習得」後の「活用」に限られている、「活用」が生徒にとって本当の意味での「活用」には至っていないなどの課題があった。「活用」する中で新たな力を「習得」することも可能であるため、「習得」と「活用」の往還を意識し、単元構成に「活用」を意図的に組み込む。「活用」では、人生や社会生活で生かす場面や、未知の状況にも対応できるような力を発揮する場面などを想定した教材の選定を行い、子どもたちが具体的に資質・能力をどう人生や社会生活の中で生かしていくのかを実感できる場面を取り入れていく。

（２）習得した力を自覚できるための、視覚化や可視化

　習得した力を活用していく中では、授業の中で、自らの学びをいかに自覚させるのかというのがポイントとなる。習得した力がどんな力で、どのような時に役立つかまでを理解していなければ活用することは難しい。習得した力を視覚化したり考えを可視化したりするなどの意図的な工夫を行うことで、学んだ力の自覚を高め活用へと繋げていく。（３）生徒の「学びの場」の具体化

　いくら「生徒たちにつけたい力」が自覚できる「習得」「活用」を見据えた単元構成であっても、生徒たちに魅力的だとは限らない。何より、まず生徒たちが、「知りたい」「やってみたい」「学びたい」と思うかどうか、さらにやってみて「学びがいがある」「さらに学びたい」と思うかどうか、こそが問われる。目の前の生徒一人一人の学びを見取り、学びを刺激したり促進したりできるような「学びの場」を具体化していく。

４　研究授業

|  |  |
| --- | --- |
| ①　「ニュースの見方を考えよう」 | ④　「走れメロス」 |
| ②　「黄金の扇風機」「サハラ砂漠の茶会」 | ⑤　「オオカミを見る目」 |
| ③　「少年の日の思い出」「ごんぎつね」 | ⑥　「枕草子」 |

５．研究の成果と課題

　研究を重ねる中で様々な「言葉による見方・考え方」を働かせる実践を行ってきたが、可視化をすることによって生徒が「今自分がどんな見方・考え方を働かせて考えているのか」、「この時間を通してどんな見方・考え方が身についたのか」等を意識して学習することができるようになった。また、音楽や映像作品といった、生徒たちにより身近であるサブカルチャーを、「学びの場」の具体化として積極的に取り入れることで、国語の授業で習得した「言葉による見方・考え方」を日常の生活や他の学習につなげて活用しようとする姿が見えた。

　そして、教師の視点から、教材研究の際に、「この教材がどんな見方・考え方を習得させるのに効果的か」、「どういった見方・考え方を活用しながら読めば読みが深まるか」と考えることができ、単元の中で何を学び身につけさせるかが焦点化され、授業づくりに大いに役立ったという成果も見られた。

しかし、同時に課題も浮かび上がってきた。これまでは１単元の中では１教材ということが多かった。それを、何を学ぶかを焦点化し、１単元の中で活用を含め２教材以上をこれまでと同じ時間数で行うことで、多読を可能にし、読みの力を鍛えていくことを理想としている。だが、単元によっては、１つの教材に時間がかかってしまい、１単元の時間数が多くなってしまうことも起こった｡教材研究を進めれば進めるほど、学ばせたいことが増えてしまうことも一つの原因だと考えられるので、その中で特に何をおさえる単元とするのか、思い切って焦点化することが必要である。

また、今後は「読むこと」で習得したことを「書くこと」「話すこと・聞くこと」などにも活用していけるようにさらなる研究を進めていきたい。